

平成26年度 デイサービス部門 事業報告

重点目標

- ①利用者のニーズへの迅速で真摯な対応と関係機関との連携の強化
- ②組織内の連携の強化及びサービス内容の充実
- ③職員の資質向上
- ④地域社会へのアプローチの強化
- ⑤環境整備
- ⑥その他

総括

平成26年度は、地域社会の皆様や各関係者の方々のご支援のもとデイサービスが開設10年を迎えることが出来た意義深い年度であった。施設として対外的な大きなイベント(コンサート)も行ったが、デイサービスにおいても、開設年より10年間ふじの郷をご利用頂いているご利用者(5名)に感謝状をお渡しするとともに、ご利用者の皆様にはお祝い膳を用意し、また記念品(ふじの郷の名入りタオル)をお渡しして、ともに10周年をお祝い頂いた。

この機会を好機として更なる安定した利用者確保に努めてきたが、昨年度、4年ぶりに年間利用者数7000人台を回復したものの、依然として安定というには遠い状況が続き、年間を通じ16名の新規ご利用こそあったが、それを上回る利用中止者等により今期は7000人台を割り込むことになった。ではあるが、問い合わせや見学の数は昨年度を上回っており、その内訳の傾向として今年度も居宅介護支援事業所を通さず、直接ふじの郷への問い合わせや見学が多かったことは特筆すべき点であると考え。同じように一般的な福祉相談等も増えてきていることを考えると、利用者数という数字には表れていないが、着実にその土台は育っており地域社会の中で福祉拠点としてふじの郷が定着してきていると言える。また、直接問い合わせをされた方において特徴的だったのは、ホームページを見て問い合わせされた方が増えてきたことである。特に体操のPVをアップしてからは体操を目的とする問い合わせが目立っており、デイサービスを選択する際、家族や本人が自身で選択する一つの資料としての活用が十分に期待され、今後、利用者確保のための強力なツールとなり得るだろうと思われる。一方、居宅介護支援事業所からの問い合わせで特徴的だったのは要支援の方の相談であった。27年度の介護報酬改定や29年度に行われる総合事業への転換を睨んでの打診も多かったと思われるが、要支援の方に向けた柔軟な対応で評価を頂いている故の数字だと考える。このような状況は今後も続いていくと思われ、さらにご利用者の状態やニーズに即した迅速できめ細かいサービスを行い、常にご利用者の視点にたつというふじの郷デイサービスとしての方向性を堅持していくことが大切であろう。

事業計画の重点施策で掲げた内容を踏まえ、今年度も主役はご利用者であるという基本

姿勢を柱とするミーティングや研修等を行った結果、組織内の連携もスムーズにいき、ご利用者の状態やニーズに合わせた柔軟なサービスを行うことができた。今年度、デイサービスは4名の新人の入職があったが、それぞれふじの郷の理念に基づいて業務を行い、内2名の看護師においてはデイサービス業務の柱として機能し始めている。引き続き今後もこの2名のみならず職員全体に対し、研修等の適切な教育・指導を行っていきたい。研修と言う点で言えば、デイサービス開所以来初めて、11月に久留米市の実地指導が入り、概ね健全に運用がなされているとの評価を頂いたものの、大きく3点について指摘された。その内容もサービスを行う上で根幹ともいえる通所介護計画書等に掛かる指摘が多く、介護事務に関する勉強不足と認識の甘さを痛感させられた結果となった。早急に指摘事項の是正に努めたが、その内の1点「運動器機能向上加算」については自主点検の上、介護給付費の過誤調整と利用者負担金の返還を行うこととなった。この件も含め、それぞれの業務における職員研修は必須であり、急務であると考え実施していく所存である。

最後に今期、調査の協力をした久留米大学の医学部看護学生による「デイサービスを利用する高齢者のサービス内容に対する満足感および幸福感に関する研究」において、ふじの郷を選択した1番の理由は「職員が親切だから」であり、職員の質が施設決定する上で大きな要因となっていたことが分かった。他、「食事」の満足度や「体操」「生演奏」に関しても満足度が高く、95%の方が利用継続を希望する結果（3%は無回答）であった。これから見ると「職員の質」に関しては今までの研修等が成果をあげたと言え、また「食事」等はふじの郷をご利用いただくための大きな強みであり、特色であることが分かる。その特色を生かして新たなご利用者確保に努めるとともに、既利用者の方においては、最後まで自分の意思で自己選択自己決定していけるよう前年度同様、機能の回復に留まらず「生活の回復」、さらには生きがいを持つ「人生の回復」に向けて支援していきたい。

重点目標別報告

①ご利用者のニーズへの迅速で真摯な対応と関係機関との連携の強化

朝礼や終礼、スタッフミーティング等を通じて情報の共有化に努め、個々の利用者様のニーズに関係機関との連絡を密に取りながら迅速に対応した。

②組織内の連携の強化及びサービス内容の充実

- ・組織内の連携の強化については総括にも述べたが、主役はご利用者であるという基本姿勢を柱とするミーティングや研修等を行い、スタッフ間のコミュニケーション・連携の強化をはかった。
- ・機能訓練においては、引き続き26年度も機能訓練に関わる職員（機能訓練指導員及び音楽担当職員）、看護師、生活相談員の3職種によるミーティングを行い、利用者様一人一人の機能に合わせた機能訓練を計画実践、また評価することが出来た。
- ・レクリエーションに関しては、デイを利用される方全体のかかわりと達成感を感じら

れるものとして、今期も引き続きタペストリーの製作を行った。利用者の方が「家でも出来る」と自信を持って帰宅できるような作品作りを行い、センターでの成功体験を自宅でも追体験できるようにした。また、利用者様と一緒に作成した季節の小物をその季節ごとにお持ち帰り頂き、大変喜んで頂けた。利用者様からの要望を反映したレクリエーションや行事も随時企画し行い、外出については26年度も時期に合わせた少人数でのタイムリーな外出を実行した。(5月ツツジ見学など) また施設外への外出だけではなく、ふじの郷にある資源(藤棚見物・お雛様飾り等)も活用し喜んで頂けた。

③職員の資質向上

送迎時における挨拶を、利用者様、ご家族様のみならず近隣の方へも行うことを引き続き、指示し徹底させた。また、送迎時のご家族との会話を重視した結果、より子細にご利用者やご家族のニーズを拾い上げていくことが出来た。ミーティングや職員研修において対人援助業務に関する内部研修を行う一方、随時、ヒヤリハットや事故報告を基にした介護技術の見直しと検討を行い、再発防止に努めた。(特に26年度は新人が多く入職した年でもあったため、基礎的な介護技術に関しての研修を重点的に行い、既存の職員も改めて自分の介護技術に関して振り返る機会とした)

職員が個人的に外部研修に参加することを奨励し、デイサービス職員として持つべき知識を習得し資質の向上に努めるようにした。また利用者様に関する細かな気付きを朝礼、終礼で報告することを奨励し、それに対する検討を随時スタッフ間で行いサービスに生かした。

④地域社会へのアプローチの強化

各種地元のイベント(満月会・そろばん踊りなど)に参加し、地域の方との交流を積極的に行った。また、出張体操においては広域にわたって行っている老人会等への従来の出張体操に加え、10月からは認知症カフェ(認知症の人と家族、地域住民、専門職等の誰もが参加でき、集う場)で定期的(月1回)な体操及び相談業務を行っている。

⑤環境整備

利用者様のニーズに応え、新たに低周波治療器2台、エアーマッサージ器(脚)1台を追加購入した。また、職員からエアロバイクの寄付があり、機能訓練のプログラムの一つとして数名の方が使用されている。

⑥その他

* 実習生の受け入れ

久留米大学(社会福祉士) 1名 (9月3日~10月6日)

* 卒業研究に関わる研究の協力

久留米大学(医学部看護学科学生) 1名 (9月下旬~10月上旬)

デイサービス部門主任 : 濱田美穂子